

シネマ通信

第21号(2026年2月18日)



センチメンタル・バリュー

監督:ヨアキム・トリアー

脚本:ヨアキム・トリアー、エスキル・ファクト

出演:ノーラ/レナーテ・レインスヴェ, グスタブ/ステラン・スカルスガルド, アグネス/インガ・イブスドッテル・リツレオース, レイチェル/エル・ファニング

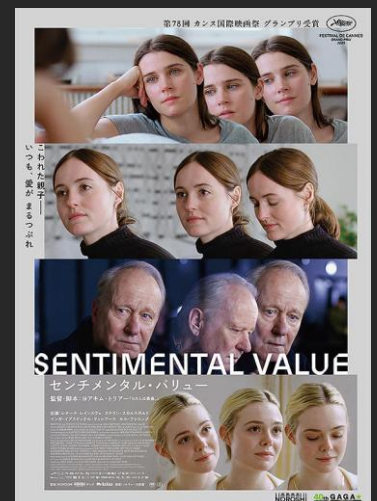
ノーラはオスロで俳優として活躍し、充実した日々を送っている。妹のアグネスは家庭を第一とする生き方を選び、夫や息子と穏やかに暮らしている。

そんなある日、二人が幼い頃に家族を捨て、長らく音信不通だった映画監督の父:グスタブが、突如、姿を現す。グスタブは、15年ぶりの復帰作となる新作映画の主演を、ノーラに依頼するために家族を訪れたのだった。しかし、幼い頃の傷をいまだに抱えるノーラは、怒りを込めてその申し出を拒絶する。途方に暮れたグスタブは、仕方なくアメリカの若手人気スター:レイチェルを主役に迎えるが...

第78回カンヌ映画祭グランプリ受賞、本年度アカデミー賞の再有力候補とされる、話題のノルウェー作品です。

第21回鑑賞作品

幼い日に姉妹を捨てた
映画監督の父が
ある日突然、姿を現す
はたして、その真意は？



About Them

第78回カンヌ映画祭で、19分間のスタンディングオベーションが続いたという「センチメンタル・バリュー」の監督が、ヨアキム・トリアーです。彼は、デンマーク生まれのノルウエー育ち。デンマークのヨーロピアン・フィルム・カレッジを卒業後、ロンドンの英国立映画テレビ学校で映画制作を学び、短編映画で受賞するなど頭角を現しますが、ノルウエーに帰国。2006年には長編デビュー作「リプライズ」がアカデミー賞外国語映画賞のノルウエー代表に選出され、一躍、期待の若手監督となりました。

アラサー女性の恋愛と人生の選択を描いた「私は最悪」が日本でもヒットし、目下、注目度急上昇の監督です。本作では、前作と同じくレナーテ・レインスヴェを主演に配し、愛憎入り交じる父娘のしがらみを活写。クリエイター同士という設定にも、好奇心がかき立てられます。

「奇跡の海」「ダンサー・イン・ザ・ダーク」「ドッグ・ヴィル」など、独自の映画世界を構築し、デンマークを代表する監督として知られるラース・フォン・トリアーは、遠縁にあたるということです。



About Something

先日「役者になったスパイ」の予告編を見ていて、ふと、私はスイス映画を見たことがあるのかしらという疑問が湧きました。帰宅後、検索したところ、日本で劇場公開されたスイス映画は、ほんの5~6本しかなく、題名も記憶にありませんでした。スイスを舞台にした映画はたくさん見たし、子供の頃、最初に憧れた外国が、美しい永世中立国:スイスでした。好感度は抜群、しかしスイスは、その実情はあまり知らない遠い国なのかも知れませんか。そんな経緯で、初めてのスイス映画「役者になったスパイ」を見てきました。舞台は1980年代のチューリヒ。東西の緊張が高まる冷戦下で、共産主義の侵食を恐れた警察が、密かに一般市民の素行調査をしていたのです。対象は活動家や外国人だけでなく、ちょっと共産圏のことを調べたりするだけでリストインされ、ひとたびフィーシュ(監視記録)に載ると、なかなか正業に就けないことが映画でも語られています。

さて、本作の主人公ヴィクトールは、ごく普通で真面目な警察官。しかし突然、印象に残らないその平凡な容姿を買われ、軍隊廃止のデモ活動を続ける劇団にスパイとして潜入する羽目に。偽名で入団したヴィクトールは、エキストラ役者として悪戦苦闘する中で演劇に目覚め、監視対象である主演女優と恋に落ち・・・という物語です。監督は、2015年に日本でも公開された「まともな男」で、シリアス・コメディともいうべき独自の作風で、知人ぞ知る存在となったミヒャ・レビンスキー。本作も前作と同様、深刻な社会情勢を背景にしながらも、ヨーロッパ風の軽妙なロマンティックコメディに仕上げられています。

本作の根底となるフィーシュは、1989年に別件からその存在が明るみに出て、スイス現代史の汚点ともいえる一大スキャンダルを巻き起こしました。当時10歳頃だったという監督自身も、学校での発表のためにシベリア鉄道のことを調べただけで監視対象となっていたというから驚きです。

日本でも監視カメラが街中に設置されることになったときは、物議を醸しましたね。しかし、それが犯罪捜査の役に立っていることは事実。要は、安心安全な市民生活を守るためのミニマムな監視は必要ということでしょう。しかし、かの人気総理が、国論を二分しても敢行したいことの一つがスパイ防止法成立とのこと。“ミニマム”を保つためには、政府に対する国民からの監視機能の強化が、ますます大切になってきそうな気配です。

文責 安東桂子